

ギルベルタ商会の跡継ぎとして

香月美夜

ギルベルタ商会の跡継ぎとして

「コリンナ、ちよつといいか？」

昼食を終えるのを待ち構えていた兄さんが、ちよいちよいと指を動かしてわたしを呼んだ。

「先に行っていて。すぐに行くから」

一足先に執務室へ向かう兄さんの足取りは軽い。わたしは胸を撫で下ろした。今日はマインちゃんが両親と一緒に神殿へ行く日で、最悪の事態を想定していた兄さんはここ二日くらいずっとピリピリしていたのだ。事情を知らないギルベルタ商会のダプラ達が怖がっていた。

「マインちゃんの神殿との交渉、上手くいったのね？」

「ああ、ルッツがさつき知らせに来た」

「そう……。よかった。マルクから聞いたけど、兄さんたらずいぶんマインちゃんのことを心配して、色々対策を考えて奔走してたんでしょ？」

「フン、俺が心配していたのはマインが店の利益になるからだ」

「相変わらず素直じゃないわね、兄さんは」

フツと笑うと、兄さんが舌打ちをして赤褐色の目で睨んでくる。でも、それが凶星をつかれた時の表情だと知っているわたしは別に怖くない。

「神殿へ取り込まれることを前提に呼び出されたなら、マインちゃんに協力することでギルベルタ商会

が貴族に目を付けられるかもしれない。わたしでも簡単に思い浮かぶ危険性を、兄さんが考えなかったはずがないもの。それでも助けたかったんでしょ？」

「コリンナ、お前……」

「こう言っただけ、マインちゃんは店の見習いにもならなかった他人じゃない。それなのに、店の不利益を何より嫌う兄さんがどうしてそこまで奔走するの？ 今後兄さんを止めるか、後押しするのか考えたいの。ギルベルタ商会の跡継ぎとして」

わたしがずっと疑問に思っていたことを吐き出すと、兄さんはひどく苦い顔になった。けれど、今後と同じようなことが起こる可能性がある以上、今のうちに聞いておいた方がよい。

「……コリンナはマインが身食いつてことは知っているか？」

「病名だけは聞いたわ。前に店でマインちゃんが倒れた時に……」

けれど、その時に身食いがどんな病気か教えてくれなかったので詳しくは知らない。気になったので人に尋ねて調べようとしたけれど、知っている人が全くいないくらい知名度の低い病気だとわかっただけだった。兄さんが何故そんな珍しい病気に詳しいのか不思議で仕方ない。

「身食いは生まれつき魔力が多いヤツのことで、病気というより体質だ」

兄さんによると、魔力を持った身食いが生きていくためには魔術具で魔力を体外に出す必要があるらしい。けれど、魔術具を持っているのは貴族だけだ。魔術具を手に入れられない身食いは死ぬしかない。しかし、神殿へ出入りすることができれば魔術具があるので延命できるそうだった。

「わたし、どうしてマインちゃんが神殿なんかに入ろうとするのかわからなかったけど、そんな裏事情があったのね」

神殿は洗礼前に親を亡くした孤児が連れていかれるところで、二度と生きては戻れない恐ろしい場所だと聞いたことがある。取引をする商人でもない限り近付かない貴族の領分だ。少なくとも平民が自分から乗り込んでいくようなところではない。

「……でも、兄さんが肩入れする理由にはならないわよね？」

マインちゃんが延命のために神殿へ行きたがるのはわかるけれど、ギルベルタ商会を巻き込んで兄さんが助力する理由にはならない。わたしが指摘すると、兄さんは顔をしかめてしばらく考え込んだ後、「頃合いいと言え、頃合いか」と溜息を吐いた。

「お前はまだ小さかったし、死因なんてわざわざ言うようなことじゃないから黙っていたが、リーゼも身食いだっただ」

わたしは思わず目を見開いた。リーゼさんは正式な婚約をする前に亡くなった兄さんの恋人だ。他の人との結婚を拒否するくらい兄さんにとって大事な人。

「……リーゼさんが、身食いだっただ？」

「リーゼの時は何も知らなくて、俺は何もできなかった。だから、マインを救う道があれば救いたかった。それだけだ。今度からは止めてくれても構わない」

兄さんの口にする「それだけ」がどんな大きさや重さを持っているか、それがわからないほどわたしは馬鹿でも鈍感でもない。痛みを堪えているような兄さんの苦い顔は、リーゼさんを亡くした頃によく見たもので、わたしまで重い気持ちになってくる。

「止めないわ。助けられるなら助ければいいもの」

「……ったく。お前がそういう顔をするってわかってるから言いたくなかったんだ。俺はマインを助け

られた。それで良いだろう？」

兄さんがそう言ってわたしの頬を軽く撫で、額をトンと突いた。

「それに、リーゼは神殿に魔術具があると知っていても助からなかったと思う。彼女の親は商人だから外聞を気にして神殿入りを拒んだだろうし、神殿に入ってしまったえば結婚はできなくなっただろう。あいつはそんな道を選ばない気がする」

兄さんは色々考えて、自分の中で折り合いを付けている最中なのだろう。リーゼさんのことは兄さんの心にずっと澱のように溜まっただけで、決して動くことがないと思っていた。それが少しずつ動いているように思えて、わたしは嬉しいような寂しいような気分になる。

「気の滅入る話は終わりだ。本題に入るぞ。神殿の一件が無事に片付いたから、洗礼式の時にマインが着ていた晴れ着を見せてもらえらることになった」

マインちゃんの晴れ着は遠目から見ても富裕層の子供のように布を多く使っていて、デザインは今まで目にしたことがない雰囲気の良いものだった。貴族のお嬢様方に提案しても受け入れられる要素があると一目で感じたわたしは、兄さんを通じてマインちゃんに「洗礼式の衣装を見せてほしい」とお願いしていたのである。

「衣装を実際に作った母親と髪飾りを作った姉の同行が条件だそうだ。どうする？」

「大歓迎よ。できれば、どんなふうに作ったのか尋ねたいと思ってたの。マインちゃんに作り方がわかるかどうか不安だったから……」

実際に作った母親が来てくれるならば、話も進むだろう。

「星祭りの衣装を全部納品し終わって余裕のある時期だから、わたしはいつでも大丈夫。マインちゃ

ん達が来るのを楽しみにしているわ」

そして、当日。「いらつしやい」と扉を開けると、マインちゃんの後ろに緊張でガチガチになってい
るマインちゃんの母親と姉がいた。明らかに北の富裕層の雰囲気、気圧された南の貧民街の住人だ。マ
インちゃんが初対面の緊張感以上の身構えを見せない子だったし、その父親も旅商人を兵士に斡旋す
るような人なので、何となく家族全員が誰に対しても身構えない感じだと思っていた。けれど、どうや
ら違ったらしい。

「コリンナ様、初めまして。マインの母、エーファです。本日はお招きありがとうございます」

「コリンナ様、わたしはトゥーリです。とても楽しみにしてました。会えて嬉しいです」

二人はわたしを「コリンナ様」と呼んで挨拶した。裁縫協会に関係するからだろう。わたしも彼女
達に合わせて対応した方が良くもしれない。

トゥーリは本当に普通の子という印象だ。わたしを見上げる目は、ダルア見習いを引き抜くためにい
くつか見学に行った工房の子達と同じで、憧れと尊敬に満ちている。エーファも同じだ。ただ、南の貧
民街の住人にしては挨拶の仕方が綺麗なので、仕事場でお客様の対応をしているのかもしれない。

……挨拶の仕方は綺麗だけど、普通の範疇なのよね。オットーが言った通りだわ。家族と比べると、
マインちゃんは本当に異質。

二人も髪に艶があつて身綺麗にしているけれど、お茶やお菓子を食べる様子を見れば作法が身につい
ていないことがわかる。富豪のお嬢様と並んでも違和感のないマインちゃん、家族とは思えない。

「……エーファは染織職人なのね？」

カップを持つエーファの指先が様々な色合いに染まっている。あの晴れ着は遠目から見てもよくできていたし、トウーリが針子見習いだと聞いていたので、勝手に有能な針子だと思っていた。

「はい、ホイス工房で染色をしています」

「ホイス工房で染められた布はわたしもよく利用しているわ。比較的安価で、綺麗に染めてくれるでしょう？ 青が特に綺麗よね」

ホイス工房の染色を褒めると、エーファが嬉しそうに笑った。少し緊張が解れたようなので、わたしは「染色が一番忙しいのはいつかしら？」と仕事の話を続ける。

「一番忙しいのは秋です。染料になる草や実が増えるので……」

染める作業より染料を作る仕事の方が大変らしい。エーファから染色の話を聞き、トウーリと針仕事の話をして、お互いの自己紹介に近い雑談をしながらお菓子を食べた。

緊張が解れてきたので、早速晴れ着を見せてもらおう。マインちゃんの編み籠から布に包まれた晴れ着を取り出され、丁寧に広げられた。一番目についたのは裾のひだと、髪飾りと同じような小花で飾られている部分だ。よく見れば、ひだの中に刺繍が隠れている。裾に刺繍は付きものだけれど、隠れるところに刺繍する意味がわからない。

「せっかくの綺麗な刺繍が隠れているのは何故かしら？」

「わたしの晴れ着をお直ししたからよ。わたしの時はちゃんと刺繍が見えてたの。でも、マインには肩も脇もずるずるだし、裾が足首までの長さになってみっともなく……」

トウーリの話の頷いて聞きながら、わたしはマインちゃんと見比べた。二人は年子の姉妹と思えない

くらい身長に差がある。そのままで使い回すのは無理だろう。

「大きさが完全に違う場合は糸を全部解いて、布を断って縫い直すのが普通みたいですけど、そうするとちよつと成長したら使えなくなるでしょう？ 摘まむだけのお直しなら、成長しても摘まんだ部分を外したらまた使えると思っただけです」

マインちゃんがどうしてこんなお直しをしようと考えたのか教えてくれる。説明されると納得できた。全部を作り直すより合理的だ。

「一人が長く使おうと思えば、なかなか理に適っていると思うわ。……普通はその時の自分に合う大きさの服を中古屋で買うと思っただけから少し驚いたけど」

「長く使うと傷んでしまっただけで買い取り価格が下がるけど、何年も使えるなら別の服を買うこともなくなるので、マインの言う通りに直してみることにしたんです」

エーファがどこをどんなふうに直していったのか丁寧に説明し始める。肩の部分を寄せてまとめて肩紐を付けた。それから、脇の余った布や裾の長さを誤魔化すためにひだにして縫って、花で飾った。言葉にすればそれだけだ。

けれど、ひだが装飾として不自然に見えないように細かい部分で色々と工夫されている。晴れ着を手にとってじっくりと眺め、ひっくり返したり裾を捲ったりしながら観察すれば、エーファの苦心と技術がよくわかる。最初からひだを付けることを考えて服を作る場合にどうすれば良いのか考えながら、わたしは木札に気付いたことを書き留めていった。

……こんなものかしら？

自分で作る時のことが頭に思い描けるようになったところで晴れ着の観察を終えて、次は髪飾りを見

せてもらう。髪飾りを手に取れば小さな花が手から零れてゆらゆらと揺れた。同じように糸を編んで作られているのに、店に出されている冬の手仕事とは全く違う形だ。

「この白い大きい方の花はわたしが作ったの」

胸を張るトウリを「とても綺麗にできているわ」とわたしは褒め、花卉の部分を目指しながら頭の中で計算する。洗礼式を終えて一年の針子見習いが全く形の違う花をこれだけ上手に作れるのだ。作り方さえわかればわたしの工房で職人に量産させることも可能だろう。様々な形の飾りを作ることができるならば、長く店で扱える商品になるはずだ。

「この髪飾り、わたしの工房で注文を取って作りたいと思うのだけれど、いいかしら？」

エーファやトウリが嬉しそうに目を輝かせたのと違い、マインちゃんだけは冷静な商人の目になって「条件次第ですね」と腕を組んだ。あの小さい頭の中で値段や条件がぐるぐる回っているに違いない。

「ちよ、ちよつと、マイン!?」

目を剥いたトウリを片手で制止しながらマインちゃんはわたしを見る。

「髪飾りは大事な冬の手仕事で収入源なので、ほいほい許可は出せません。どうしても作りたいと言うなら、権利を買っていたかかないとこちらとしては困ります」

わたしと話をしているように見せかけているけれど、家族に現実を教えているのだろう。「収入源」という言葉にトウリが口を噤んだ。

「では、ベンノ兄さんとお話ししてくださいな」

「そんな金額では売れませんって。フリーダに売った方がマシです」

小金貨五枚と大銀貨八枚を鼻で笑ったところから、兄さんとマインちゃんの商談は始まった。よほど兄さんの影響を深く受けているのか、ウチの見習いでもないのにマインちゃんは一端の商人の顔になっている。

……兄さんを相手にどこまで粘るのかしら？

マインちゃんの様子を観察したいけれど、兄さんが非常に悪どい顔をしている。あまり印象を悪くしないためにも、商談の雰囲気には圧倒されて呆然としているトウリー達の関心をずらした方が良さそうだ。「トウリー、エーファ。長引きそうだから、こちらへいらつしやい」

わたしは立ち上がると、部屋奥の方にあるテーブルへ二人を誘導し、貴族の間で今流行している服や飾りの話を始めた。針子見習いをしているトウリーならば喜ぶだろうと思った通りに目を輝かせて話を聞いて質問してくる。

……素直だし、上手く教育すれば伸びそうね。

ある程度話をすると、トウリーは商談の様子が気になるのかチラチラと視線を向け始めた。それを機会にわたしはエーファへ話しかける。

「無事に神殿との交渉が済んでよかったですね。わたしも兄さんも心配してましたから……」

「はい。最悪の事態としてマインが神殿に閉じ込められ、トウリーが住み込み見習いになることも覚悟していましたが、無事に終わってよかったです」

神殿の交渉で両親共に命を落とすことも考えていたらしいエーファの覚悟が伝わってきて、わたしは軽く息を呑んだ。

「ギルベルタ商会の皆さんがずいぶん協力してくれたとマインから聞いています。わたし達には身食い

という病名さえわからなかったので本当に助かりました。交渉したとはいっても、自分達には手が届かない神殿へ行くのです。親としては心配でなりません。それでも、マインの命が助かっただけでも嬉しいと思います」

尽きていく命をただ見ているしかできなかつたから、とエーファが涙ぐんだ。その顔が何となくリゼさんのことを語る兄さんと似て見える。

「コリンナ様、ギルベルタ商会はどうしてマインにこれほど良くしてくれるんですか？」
わたしと同じ疑問をエーファも抱いていたらしい。わたしは喧々諤々と言いつ合っている二人に視線を向けた。

「……兄さんは大事な人を身食いで亡くしました。マインちゃんのことを他人事だとは思えなかつたようです」

「そう、だったのですか……」

エーファが何と言えは良いのかわからないような顔で言葉を探して目を伏せる。きつと兄さんと話をしていた時、わたしもこんな顔をしていたのだろう。

「神殿に入れたら終わりではないでしょう？　マインちゃんがこれからどんなふう生きていくのかわかりません。でも、わたしも兄さんもマインちゃんが助かってよかったと思っています」

「ありがとうございます。本当に、ありがとうございます」

「お疲れ様。結局いくらで決着がついたのかしら？　それによって、こちらの値段設定もあるの」
マインちゃんはエーファ達をちらりと見た後、パツと指をいくつか立てた。

……大金貨一枚と小金貨七枚。まあ、すごい。

「よくベンノ兄さんからそれだけでもぎ取ったわね」

洗礼式直後の子供とは思えない。わたしが心底感心していると、トゥーリが値段を知りたがった。

マインちゃんはそのすぐ躊躇って、逃げ道を探すように辺りを見回した後、小さく金額を告げる。

「ええっ!? 大金貨一枚と小金貨七枚!?」

「すごい金額に聞こえるけど、権利の譲渡として考えると適正価格だからね。ベンノさんじゃあるまい

し、ぼったくりなんて、わたし、してないから」

マインちゃんは必死に言い訳しているけれど、家族に隠れてそれだけの商売をしている子供なんて、

南だけでなく北にもいないと思う。

……わたしが親でもビックリすると思うわ。

マインちゃんの母親であるエーファは、ビックリを通り過ぎたようで、見ていて気の毒なくらいに真

っ青になっている。

「神殿の件でずいぶんと骨を折ってくれた恩人に対して……大金貨一枚と小金貨七枚……?」

「あの、エーファ。商人として兄さんが適正だと決めたことですから……」

気にしないように、とわたしは何度か言っただけれど、エーファはあまりの金額に眩暈でもしているの

か、今にも卒倒しそう。

……マインちゃん、神殿へ行ってもこの調子で色々なことをやらかしそうね。